

河原井さん・根津さんらの「君が代」解雇させない会 講演会（2017/3/5）

日本は中国で何をしたのか

山邊悠喜子さんの見続けた中国民衆の姿

満州国全図



第四野戦軍行程概略図

- ① 1945.12
ここで組織し、活動を開始した
- ② 1946.5～46.10
収容傷病員
- ③ 1946.10～47.4
収容傷病員
- ④ 1947.4～48.9
夏季、秋季、冬季攻勢の傷病員収容
- ⑤ 1948.10～48.12
遼沈戦役の傷病員を収容
- ⑥ 1948.12～49.2
平津戦役の医療準備工作
- ⑦ 1949.3～49.4
南下前の準備工作
- ⑧ 1949.4～49.5
主として政治教育と専門分野の訓練
- ⑨ 1949.5～49.7
戦闘の傷病員は無、部隊の休息と訓練
- ⑩ 1949.7～49.8
宣沙戦役の傷員を収容
- ⑪ 1949.8～49.9
衡宝戦役の準備
- ⑫ 1949.9
部隊の迂回作戦行動にしたがって保衛工作
- ⑬ 1949.10
衡宝戦役の傷病員を収容
- ⑭ 1949.11
広西戦役の準備を行う
- ⑮ 1949.12～50.1
休息と整頓
- ⑯ 1950.3～52.10
傷病員の収容治療(一部)
- ⑰ 1950.3～1953
現在の「一八一」医院設立、現在に至る



『中国人民解放軍 第一八一医院院史 1946年3月～2000年12月』より

目 次

敗戦の日、そして「東北民主聯軍」に	4
東北民主聯軍 敗戦直後の本溪市	6
民主聯軍の日々（断片）	9
「老区」の点描	10
これが日本？	11
名目 日本語教師	12
歩平先生と東北四省の現地調査	14
各位へのお願い	14
終章	17
註 1,2	18
付記	20
山邊悠喜子さんの歩み、概略	22
紙芝居「静かなる悪魔 知られざる 731 部隊」について	23

『人民解放軍と共に歩んで』

敗戦の日 そして「東北民主聯軍」に

考えてみると、私は学齢期に丁度戦争でしたから、教室に座って勉強した経験がないのです。では、学費を払って何を学んだのか？と聞かれれば、

1941年私は父の赴任先中国遼寧省本溪（湖）市に来て、本溪湖煤鉄会社の社宅に住みました。この年偽満州国は関東軍特種演習を始め、42年には満州にも国家総動員法が発令されて世情は戦争一色となりました。勉強より勤労奉仕の時代でした。一週に二度、その内週一度の登校日が設定されていたようですが、まともな学習は殆どありませんでした。軍事教練の他には、空襲に備えてけが人の救急処置等が主になったようでした。防空壕掘や、農作業の毎日でしたから、私は今でもエンピツを持つより鍬を持つ方が身についた生活でした。敗戦間際には男性教員が出征して学校は教員不足でしたから、女学校の高学年になった私たちは急遽在満教務部主催の教員養成所で簡単な講習を受け、小学校教師になりました。戦局は切迫して落ち着かず、教師と言っても子どもたちとソ連軍の攻撃に備えるのだと道路の両側に蛸壺を掘る作業が命じられました。

45年8月15日、私は何時も通りに子どもたちと、蛸壺を掘っていました。午前中の作業が終わる頃、今日はもう作業停止、学校に集まるようにと言われました。

ラジオから不明瞭な音声の流れ、かすれ声でした。私はきっと良い日本国民ではなかったようです。戦争が終わった。もう蛸壺掘はしなくて良いと思うと、これから始まる様々な苦難には考えが及ばず、居眠りをしていました。

起こされて、大体の様子が分かると、「天皇様は切腹？」と話合いながら家に帰った記憶があります。

何時も日本人は中国人（当時は満人と言った）に対して傲慢でした。子どもたちの間でも日本人の子どもが優先的地位を占めていましたが、敗戦間際になると何となく雰囲気が変わってきました。何時も行き交う子どもの会話で、今まで軍と言う虎の威を借りた狐のように私たちは日本人と言うだけで威張っていましたが、敗戦となれば以前の通りというわけには行きません。何日か前には中国人の子どもが、「お前たち威張っているけど明日はもう駄目だよ！」と、無遠慮に言いましたが「バカ言うなよ、関東軍がたくさん居るじゃないか！」と言い返していました。これが子どもの口喧嘩ではなく現実になってしまいました。（こんな会話さえ以前には全くありませんでした）。自分で言いながら何日か前には本土防衛で帰国すると言う、高級兵士とその家族に駅でお湯を振る舞って「本土の防衛お願いします」と送り出したことなどが思い出されました。関東軍などはもう誰の目にも居なくなったのです。

8月15日以後は、どこから湧いて出たのか、大勢の中国人が「勝利万歳！」と叫んで行進していました。やっぱり日本は負けたんだ。その時の実感です。

私たちは今まで統治者の側において、中国人を顎で使い、何の不自由もなく彼らの奉仕を受け入れていたのです。会社は、すべてが近代化だと豪語して居たはずですが、それは中国人の労働に全てが支えられての事です。敗戦から、統治者はもう無力です。電気、水道が止まり一杯の飲み水にも困窮しました。私は近くの農民の井戸に水をもらいに行きました。日が経つにつれて全てが「無い」生活にはそれなりに慣れましたが、東北の9月はもう風が冷たく感じられました。いままでは暖房の部屋で寒さを感じることはなかったのですが、もう暖房を炊いてくれる人は居ません。寒さが厳しくなると窓についた氷の花が殊の外綺麗に見えました。文化的な生活にはない、忘れていた季節感でした。銀行は大戸を下ろし、当初は満州紙幣が使えなくなりました（後には使えるようになったと聞きました）が、急に惨めな生活になり

ました。

すこし後戻りしますが、私の住んだ本溪（湖）市を紹介しなければなりませんね。

1904年日露戦争が始まると、日本企業の大倉組が軍に従って、安奉線沿線の石炭・鉄鋼の調査を行い、価値を確認してから、05年に石炭採掘願いを提出しました。それには「軍用を優先して、残りを販売する」との条件で、本溪湖炭鉱の採掘権を得たと記述があります（可笑しいですね、未だこの時は日本に権利が無いはずです）。06年には満鉄の設立に関する勅令が出されました。（1944年には、鞍山昭和製鋼所・通化の東辺道開発株式会社・本溪湖煤鉄会社の三社が合併して「満州製鉄株式会社」を設立、本溪湖煤鉄会社は「満州製鉄本溪湖支社」と改名しました。）

本溪城市史に以下の記述が見えます。

07年には、本溪湖煤鉄の採掘権に清朝政府は口を出せず、大倉は三箇所に斜坑を開き12万屯の石炭を略奪しました。

本溪湖大倉炭鉱の設立は、我が国侵略による産物であり、清朝政府の軟弱な売国行為の結果である。つまり全中国獲得を目指して、東北は事実上その兵站基地となったのです。では、資源を採掘する労働力は？

各地で封建的な把头〔徒弟〕制度を利用して、好条件を提示し、貧しい農民をかり集め、低賃金で酷使、又は、華北の戦場で、逮捕した国民党軍や八路軍の兵士、解放区の行政幹部など（「特殊工人」の名前で呼ばれた）戦争捕虜を各地の訓練機関での思想訓練を経て、東北へ送りこみました。彼らに対する労働は特に過酷であったと、現場体験者の証言があります

侵略者は「人命より石炭」、労働力はタダ同然、これら劳工たちの生活は「牛馬以下」と言われました。当然のことですが重労働に耐えかねた中国人劳工の抗議の暴動が頻発しました。安全を無視した労働強化と、炭鉱の大爆発により、犠牲者が多数でました。産業開発五カ年計画（36年11月）の決定で、要求出炭量が急増し、更に労働が強化されました。

私も同市に居住していましたが、1942年4月26日の事でした。大音響と共に坑道が、爆発しました。当時の記録にはこの爆発で1527人が死亡（世界第二位の事故）、その中に特殊工人と言われる276人も含まれると記録されています。

日本が侵略した期間に、（本溪の場合）搾取した石炭は1616.6万ト、1905年から敗戦までは、2369.49万ト、この間の公司准利益は6667.66万元、2600人の劳工の命が失われたと記録にあります。（上記市史より）。

山紫水明現地の住民は、自然に掘り出される石炭を燃料にして、生活していました。でも日本人の到来で生活は一変したといわれています。

当時の私は、彼らが怒りを込めて偽満州と呼ぶ東北の実情は、全く知りませんでした。でも42年の爆発では、坑道で働いて居た人までが外部に吹き飛ばされ、病室に入りきれない被害者に取りすがって名前を呼ぶ、かなり年配の女性の姿は、今でも忘れる事は出来ません。

原因は分からず、特殊工人が生産力妨害のために爆発させたともっぱらの噂でしたが、同僚の命まで奪って坑道を破壊するとは考えられません。一切は軍命による秘密との事でした。

当時ここで働いていた尚宝徳さんはこの事故で幸いにも生き残った一人です。当時彼は柳塘坑口内100m程内部で仕事をしていました。爆破が起きた時、彼と同僚は巨大な気流に乗せられて坑口から外にはき出されました。彼が気を失ってから目を覚ましたとき、傍にお爺さんが、「何処の子供だ？」といながら私の体に巻き付いた鉄線をほどいてくれました。未だ朦朧としていましたが全身は傷だらけで

日本は中国で何をしたのか—山邊悠喜子さんの見続けた中国民衆の姿（報告）

した。頭を巡らすと後部の坑口から黒煙が火炎と共に立ち上がっていました。私と一緒に働いていた友人たちは皆まるで肉の餅のように潰されて亡くなっていました。

今、山頂に日本当局の設立なる「産業戦士殉職の墓碑」が建っています。背面に「作業中の 1327 名の産業戦士が壮烈に殉職した」と書かれ氏名が記されています。

しかしこの事実は、詳細は軍事機密として公表されませんでした。遺族に対する気遣いは成されたのでしょうか？それは分かりません。（『走過地獄』侵略時期に生き残った勞工の回想 李秉剛 他著）

東北（抗日）民主聯軍；

野営の時、戦友が故郷を思って歌う一節を思い出します。

「♪我的家在东北松花江上 那里有森林煤砒还有那满山遍野的大豆高粱 我的家在东北松花江上 那里有我的同胞还有那衰老的爹娘

九・一八、九・一八 从那个悲惨的时候儿 脱离了我的家乡抛弃那无尽的宝藏 流浪、流浪 整日价在关内流浪 那年哪月 才能够回到我那可爱的故乡 那一年那月才能够收回我那无尽的宝藏 爹娘哪、爹娘哪什么时候儿才能团聚在一堂……♪」（1938 年作）

東北は歌のように豊かな資源に恵まれた美しい所です。

それは松花江の上流にあり、労働には大豆や高黍がたわわに実る……そこには深い森林と石炭があり、山一杯に大豆や高黍がたわわに実る。そこには私の同胞や歳老いた父母らが暮らしている。

1931 年 9 月 18 日、それは我々東北人にとって忘れ得ぬ屈辱の日、あの時私は愛する家も無尽蔵の宝の山も離れて関内を流浪する。何時の日にか、私はきっとあの宝の故郷を取り戻す。あの懐かしい故郷に、父母よ！きっと故郷で共に暮らせるようになるから……。 (概略)

言葉から見ると、故郷を追われた悲しみ、怒りを思うが、戦友たちが唱うとき、それは父母への決意、誓いの言葉に聞こえるのです。

直後の本溪市；

敗戦後、本溪地区も混乱が続きました。今まで偽満州国で指導的立場にいた国民党系の「維持会」、本溪湖煤鉄会社の社員などを中心にした「在満居留民会」があり、戦争中の隣組組織を元に、地域の伝達事項の仲介などをし、これらが活発に動き始めました。もう一つ目立たない組織がありました。戦時中毎日の新聞の隅に、小さく「匪賊〇〇名処刑、逮捕〇〇名」等の記事がありましたが私たち一般市民は（悪いやつがいなくなって良かった）位にしか関心を持ちませんでした。今にして思えば、ここに処刑されたとある人々こそ私が後に深く関わる。「東北（抗日）民主聯軍」の先輩たちなのです。

この部隊は日本の侵略に反対し、自らの国土を守る事を戦いの趣旨に掲げていました。でも実際には軍備があったわけではありません。彼らの武器は土槍[トゥーチャン]（銃）と呼ぶ手製の銃や敵から奪った刀などで、軍隊と言いましたが、軍人が指揮しているわけではありませんから、土地に生きて、土地を守る、土地を脅かす者が敵でした。何故この軍隊が生まれたのでしょうか？之までの偽満州、淪陷 [(lun xian) 占領された] 14 年の歴史を見れば頷ける筈です。この軍隊の生みの親は、言うまでも無く、(日本の) 侵略者偽満州国の組織者、関東軍に他なりません。強大な軍の力を背景にして、上記のような企業による過酷な資源略奪があり、多くの中国同胞、親兄弟が命を奪われたのです。

抵抗組織の前身は「東北（抗日）自治軍又は義勇軍」で、日本敗戦後（抗日）がとれて「東北民主聯軍」と改められました。部隊はその 50% が農民で、開拓団に耕地を奪われた過去を考えれば納得がいくことです（残りの 25% は満州国軍兵士、官吏、警察官など、他の 25% は学生等知識人、他に所謂匪賊といわれた

日本は中国で何をしたのか—山邊悠喜子さんの見続けた中国民衆の姿（報告）

人)。これら抗日部隊の掲げるスローガンは「宁为抗日死，不做亡国奴」（ning wei kang ri si、bu zuo wang guo nu 抗日の為に死んだとしても、亡国の奴隷にはならない）、「宁死不屈」（ning si bu qu たとえ死んでも敵に屈しない）この呼びかけに多くの人が呼応して、「北山」に集まり抵抗しました。1931年9・18にはその数8万と言われました（それは、種々雑多な抵抗組織の集合体でした）が、1940年～41年には40万にも増大したと記録されています。（侵略者の様々な圧力で一時抗連は活動が低下しました）

41年12月太平洋戦争が始まり、ソ連を敵とした関東軍特種演習の実施など、軍事的緊張が高まりました。この状態の中で関東軍が最も頭を悩ましたのが、抗日軍の存在でした。これこそが東北安定の癌だと言われ、抗日軍を支援する民衆との離間を目指して、大規模な討伐を実施する一方「集家併屯」（住民を一カ所に集めて生活、居住の自由を奪いました）を実施して抗日軍への補給を断ち、息の根を止めようと画策しました。この政策は華北の三光政策【日本軍の「焼き尽くし、殺し尽くし、奪い尽くす」とう戦術】にも応用され東北が発起点となったと記録にあります。

抗日軍は住民に依拠し、互いに助け合いながら生存していますから、関東軍の政策は一時抗日軍の活動を抑えましたが、それで消されることはありませんでした。更に彼らの一部は国境を越えて対岸のソ連に渡り、国際旅団を造り、軍事訓練や政治学習を通じて自らを鍛え、時機の到来に備えたと言います。

「屋根は無限に広がる天空、緑野は柔らかいベッド」（抗日軍兵士が自らの生活を表現したものです）彼らの苦難の活動は、日本の敗戦まで続き、45年8月、ソ連が宣戦布告して東北に進攻を開始したとき、ソ連で訓練を続けていた抗日聯軍の兵士たちが先導したと言われています。

40年～41年は、確かに抗日聯軍にとって冬の時代と言えますが、かといって決して力が衰えた訳ではありません。彼らは一部の連絡員を残して情報を集め、戦いに備えていました。根底には中国共産党の指導する強固な抵抗力がありました。

しかし、私には彼らの意思が理解出来ず、後年元の指導者を北京に訪ねたとき；「今だから貴方に言えるけれどあのとき（日本敗戦時）には、恐らく貴方は理解出来なかったでしょう」と、いいながら幼いとき故郷の山東省で兄たちの活動に自供を逼って逮捕された事などを詳しく話してくれました。（この詳細は、後年『琅珞の炎』として日本で出版しました。）「何故あの時私に話してくださらなかったの？」との質問に、「私自身が、日本の鬼を指導してあの困難な時を闘っていけるか自信がなかったのです」と率直に語られました。そして日本軍に逮捕された時の体験を懇切に説明されました。やっと当時の疑問を話し合える時になったのです。全く笑顔のない李世光教導員の厳しい顔を想起しながら、厳しい歳月の流れを思いました。それは第四野戦軍と言われたあの時代を追想しての事でした。

日本の敗戦から、抗連は、厳しい蒋介石との内戦に引き継がれました。

余談になりますが80年代後半、私は吉林省長春の白求恩医科大学（ベチューン大学）で学生と交流した事があります。学生の質問です。

「中国は貧しいけど外国の軍隊は一人もいません。日本は経済的にも豊かな国と聞いていますがなぜ、外国の軍隊が居るのでしょうか？沖縄にもたくさん米軍基地があると聞いています」。

私は何と応えたら良いでしょう。でも彼の質問は決して彼個人の問題ではないのです。幼いときから抗日聯軍の活動を聞かされ、彼らの英雄的な活動を聞かされて育っていますから、幾ら貧しくても外国軍隊がいて自分の国を売るような行為は、彼らにとって考えられなかったのです。私が彼の質問に時間を掛けて答えても、それは状況の説明であって質問の本質に答えては居ないのです。質問は、日本は？日本人は？自分の国内に大きな顔をして存在する外国軍隊を何故赦すのか？と聞いているのです。之はあの偽満州国の屈辱があつての質問なのです。

皆さんなら、どのように答えられますか？これこそが私が帰国して初めて自分の意志を問うた砂川事

件裁判があるのです。

私は最近、中国でこの同じ質問に会いました。

「今の安倍政権は、アメリカと仲良し、日本人はこれを赦しているのですね」。アメリカが支援する蔣介石の国民党軍隊こそが我々の敵でしたから。

東北民主聯軍が今も民衆の中に生きていますと感じました。同時に之が普通の考えでは？と思います。東北民主聯軍を人々は親しみを込めて「抗聯」と呼びます。

私はこの部隊に参加しました。；

敗戦後、私たちがまだ悶々と敗戦の実態を理解も出来ず、右往左往して居たとき、隣組の回覧がありました。「内戦に備えて、傷員の治療に、若くて多少の医療知識のある方、協力してください。期限は三ヶ月」とありました。（詳細は忘れましたが概略このような回覧板です。）文面の主は東北民主聯軍とありました。民主聯軍とは？当時は全く知らない名前でした。否、知っていたはずです。毎日の新聞に「匪賊〇〇名」とあったのですから。

敗戦は、誰にも体験がありません。明日生きて行けるのか？頼る者は何か？誰も答えを持っている人はいません。父は敗戦と知ると神棚から天照大神宮と天皇の詔勅を外すと裏庭で燃やしていました。それはつまり、抛り出された、自分で生きろ！いえ、どうにでもなれ！の心境でしょうか？

このような投げやりの毎日でしたが、ある日身なりは汚いが優しそうな若い中国人兵士が「鍋を貸してくれませんか？」と我が家のドアを叩きました。どうせ、私たちは帰国するだろうから、家財道具は整理しなければなりません。考えてみれば戦時中日本の軍隊も良く物を借りに来ました。貸した物が返される事は殆どありませんでしたが、ないものは互いに利用して生活するのが当時の習慣でした。ですからこれらの事はあまり気にも留めていませんでした。

勿論、母に中国語が分かったわけではありませんが手真似で大体を察しました。どうせいらないのだからと母が一番古い鍋を渡しました。当時の事ですから、この鍋が返されるなどとは考えもしなかったのですが、数日経って、あの若い兵士が綺麗に洗った鍋を返しに来ました。母はもういらないからと言いながら受け取ってみると随分重いので蓋を取ったら中に東北特産の赤大根が二個入っていました。（当時の東北の冬は殆ど野菜がありませんでした。ましてやまだ外に出て食料を買い求める事もままならない時です）母は、こんな大事な物を頂けないと断りましたが、兵士はきちんと「ありがとう。助かりました」と一礼して帰って行きました。見たところ着ている綿入れは汚れているし、恐らく何日も歩いてここまで来たのでしょうか？兵士は13、4歳と見えましたが、今まで見たこともない爽やかな印象を残したのです。

「私たちは、もうすぐ日本に帰るでしょうから、使ってください」帰る兵士を引き留めて、母は言いました。たどたどしい日本語で小さい兵士は「お借りした物は返すのが決まりです」と言い、鍋を置くのと丁寧な頭を下げて帰って行きました。訪れる人もなく、息を殺して家で隠れるようにしていたあの時代、後に爽やかな印象が残りました。たったこれだけの事ですが、明日どうなるか予測も出来ない、否予測しようとも出来ない時代です。些細なこの出来事が何か人間の生活が帰ってきたような、そうです。「一緒に生きましょう」とでも言うような、おかしい事ですね。彼があのかの回覧板の部隊の人なのかどうかは分かりません。ただ、私たちは互いに助け合って生きて行ける。という思いとでも言えるのでしょうか。些細な一時の事ですから、特に説明の要は無いでしょうが、それは私と母の感慨です。

話は前段に戻ります。彼の汚れた綿入れの胸に白い布が貼り付けてあったようですが、汚れていて書いてある字の判別はできませんでした。でも、人を求めている主は、あの礼儀正しい兵士の部隊かも知れないと勝手に思ったのも事実です。回覧板では期限「三ヶ月」と有りましたから、私が「あの軍隊見に行くよ」と言うのと父が「何を言ってるんだ、あの軍隊がどんな所か知っているのか？」と叱られました。しかし回覧板には戦時中から命令のような力がありましたから、どうせ行くなると勝手にきめまし

た。私は「家で遊んでいるより、三ヶ月見てくるから」と、能天気な判断で応募しました。出発の前夜、父は「どんなことがあっても生きろ！」と、厳しく言いましたがその時私には父が何を言っているのか全く理解出来ませんでした。「生きるって当たり前でしょ、三ヶ月はあつという間だよ」（1945年12月）、私の人民解放軍の前身「東北民主聯軍」とのつきあいはここから始まりました。

民主聯軍の日々（断片）；

1946年3月、軍は本溪から桓仁へ、ここで軍の整頓があつてここから本溪の防衛戦が始まりました。4月には国民党軍が大挙して本溪市に入り、本溪は大変だとのニュースが何となく伝わってきましたが、私たちの仕事は、戦闘で傷ついた人の治療でしたから、父母の安否が気になってはいたのですが、仕事に忙殺されていました。

私たちの仕事は日本的には野戦病院です。戦闘の厳しさは傷員の負傷の状態から判断できますが、傷員の治療も大病院があつて、医療器材が整っている中での処置ではありませんから、古い学校や元の公的機関があればそこが病室兼治療室です。でも、当時住民が住んでいるのは小さい一家が住まうだけの手造り小屋でした。つまり農民の家が病室に成りました。「老区」[古くから解放の解放区]と言われる所は、元日本軍と戦った解放区で語り継がれた伝統のような雰囲気がありました。想像してください当時の中国農民の暮らしを。とてもお客を迎える条件はありません。家は負傷した兵士を寝かせるだけで一杯です。護は一通り治療が終われば、私たちは夏なら星の輝く大地で休みました。

「村は大きな病院、農家は病室、農民は看護婦」と、表現されますが本当にその言葉通りです。所謂「老区」は、説明の必要もありませんが、農家は収容した傷員を炕[カン: オンドル]に寝かせ、親切に世話をしてくれます。農民は私たちと同じように土間に高粱殻を敷いて休みます。私たちは、綿大衣[綿入り上着]・薄い布団を掛けて寝ました。東北の冬は寒さが厳しいですから、傷員も看護に当たる農家の女性たちも決して楽ではありません。私は今でも思い出しますが農家の女性は傷員の世話に一晩中寝ずに看病しています。私たちの婦長も決して中国語が出来るわけではないのですが、女性たちに手振りで介護の要点を教え、彼女たちは真剣にこれを学んでいました。

特に私が注目したのは、当時は日本の敗戦からさほどの時間が経っていません。でも、私たち日本人に対して決して特別な対応（怒りや、蔑視など）等は全くありませんでした。私は軍中央から「参加している日本人は戦争捕虜ではない。我々の協力者だ」と説明があつたと聞いてはいましたが、日本に対して好感を持っている人は恐らく居ないと思いましたが、私は少し身構えました。でも、それが杞憂であつたことは日を追うごとに実感できました。

彼女、彼らは、私たち日本人を、介護をしてくれる同志（僚）としての対応でした。二、三日もすれば共に打ち解けた交流が出来ました。婦長は元々農家の出身でしたから、手真似脚まねの対応には私たちまで引き込まれて大笑いでした。彼らは決して過去の日本を忘れた訳ではないでしょう。あの時代、特に解放区と言われた共産党の支配区域がどのような、圧迫を受けたかを思えば理解出来ます。でも私たちに対しては、中国の内戦に協力してくれる日本人だと見て対応してくれたようです。私たちは何の説明も受けた訳ではありませんが、暖かい彼らの対応に心が自然に和むのを覚えました。本当に不思議です。それこそ『一家人』[家族]なのです。

恐らく日本人の感覚だと自宅に重症患者を受け入れて介護すると聞くと、おおきな部屋のある邸宅を想像されるのでしょうか？

炕に夫婦二人が寝られれば十分という狭い家です。勿論、北京で見るとような四合院を構えた地主の家がないわけではありません。でも私の感覚では、傷員が心おきなく休めるのはやはりこの小さい暖かい

雰囲気の家ではないでしょうか。

「老区」の点描；

冬の夜、農民たちは暖かい炕に傷員を寝かせ、自分たちは私たちと同じに高粱の殻を土間に敷き綿大衣を重ねて寝ます。ふと寒さに目を覚ますと、農家の嫁さんが傷員の痛い所をさすり、暖かい白湯を飲ませて看護しています。軍隊の傷兵をどうしてこんなに親切に介抱するのでしょうか？はじめは分かりませんでした。傷兵は用があると「大爷」[ダーイエ]、「大娘」[ダーニャン]と呼び、叔父さんお婆さんは「儿子」[アールツ：子供]と返答します。私は最初、この傷兵はこの家の息子なのかもと思ったのですが、そうではありませんでした。傷兵は全国解放のため、戦ってくれて傷を負ったのだから、自分たちで介護するのは当然、つまり兵士と農民は心をつにした同志であり、我が子同然ということなのです。つまり『一家人』。寒い夜、お爺さんは、愛する我が子「儿子」の為に世話をしているのです。

日本との戦争が終わったばかりですから、私には侵略の意味は全く理解出来ませんでした。でも、自分は食べなくても傷兵に粥を食べさせる。献身的な農民の様子を見てみると、忘れていた父母を思い出しました。毎日農民と兵士の対応を見ているうちに、先の日本の戦争が全く国民とは別の次元で行われた事に注目せざるを得ませんでした。

国民の為にある軍隊、国民が全力で支持する軍隊。何となく納得しました。

私たちは、軽傷者は治療して快方に向かえば前線へ、重傷者は緊急処置をして更に後方へ送りますが、それでも緊急に手術が必要な場合があります。しかし、貧しい医療器具、医薬品の不足は素人目にも明らかですが、手術用のメスや注射針は石で磨いで針の長さが1釐位になるまで使いますから、元日本の病院から来た人が持ってきた医療器具も丁寧に使用しました。でも、傷兵の苦痛はどんなだったかと思えます。

私は、俄（にわか）看護婦ですから、麻酔が始まると傷兵が目を閉じる前に補助する私が卒倒してしまいました。医師から、使い物にならないと叱られて、以後は重傷者の介護に回されてしまいました。

その後の遼沈[りょうしん]作戦[1948年9月から11月まで52日間続いたこの戦役では人民解放軍が瀋陽、長春、錦州で中華民国陸軍を撃破、満州全域を占領]では、蒋介石の軍隊に米軍が支援を始め、この戦争から飛行機による空爆が始まりました。之までは単純な傷が多かったのですが、以後は一度に多くの負傷者が出るようになりました。頭部、顔面などの戦傷も増えて悲惨でした。

でも、特筆すべきは如何なる場合でも、皆持てる能力を使って何とか切り抜けた事です。例えば、重症傷員にも布団さえ十分ではありませんでした。大腿部の負傷は、代理の木片に包帯を巻いただけで副木にしましたが、ここに蠅がたかって蛆を生み、蛆は膿を食べて太りますがそれらが成長して飛んでいくと不思議なことに傷口が乾いていくのです。医学書にはなかったでしょうが、その傷の上に中国同志が山から薬草を集めて傷口に貼ると、みるみる傷が回復して行きました。勿論論文を書くような用意はありませんから、之（これ）が医学的に妥当であったかどうかは分かりませんが、戦場では、漢方も日本古来の治療法も、或いは西洋医学も使える物は何でも活用されました。

勿論当時は電気がありませんから、小さな皿に油を入れて布団の綿を少し取り出し、油に漬けて火をともします。俄（にわか）作りの灯火です。このささやかな明かりを頼りに、唯一人の日本人医師がソビエトからの医学雑誌を熱心に読んでいました。

私たち日本人は、戦争の真実は何も知らず、ただ天皇の命令に従いました。でも、目の前にけがをして苦しんで居る人がいる、そして、その人は自分の国を自分たちの力で守ろうとしているのです。今ま

で知らなかった感動が私を包み込みました。何故だか知らないのですが私たちもこの行動の中で鍛えられたと言えば少し大げさでしょうか？この戦いの意味も、あの日本が発動した戦争の事も私は全く分かっては居なかったのですが、何か引きつけられるように、自然に賛同し、彼らと行動を同じくしていました。なぜ？理由は不要です。

兵士たちは時間があれば農作業を手伝います。私たち日本人は、最初は見ているだけでしたが、喜んでくれる農民の笑顔に、この作業にも加わるようになりました。家の掃除や水くみなどは日常的に誰言うとなく行いました。部隊の大多数が農民出身ですから、宿営地では何処に行っても住民から歓迎されました。日が落ちると小さい灯火のもとで、住民の訴苦を聞きます。もし、中国語が分かっていたら、どんなに良かったでしょうが、当時の私は只、涙ながらに訴える人々の表情を見て状況の概要を知るだけでした。怒りと共に、吐き出される「鬼子！」[クィズ：鬼]が、頭にこびりついています。

1947年4月、[吉林省] 白山市江源県林子頭は鉍山の町です。以前日本人の作業員が住んでいた住宅を利用して傷員の病室にしました。私たちもその一角を治療室として使いました。この住宅の前方に石人駅がありました。有名な石人炭鉍に近く、血泪山（原名；浴淋塔山）として知られています。かつて日本がここの鉍床に目を付け、炭鉍を開いて、奴役に劳工を集め、過酷な労働に1万余の劳工が死亡したと言われます。日本側はこの浴淋塔山に死体を投げ捨て、以来この美しい山々は全山が白骨眠る山と化したと言われています。83年には吉林省人民政府が重点文物保護單位に指定したとの事です。

石人は鬱蒼とした密林の中にあり、昼間でも薄い霧に包まれて、私たちが訪れた時は、まだ整備されていませんでしたから、各所に劳工の骨などが見えました。1963年には階級教育の為に展示館が出来、参観できる記念の場所が8カ所あり、総面積は1300平方メートルと言われています。全国開放後、山頂には『日偽統治時期死難鉍工記念碑』が建てられたそうです。

ここには、数少ない生存者の証言から当時の日本侵略者の実情が余すところなく暴露されました。所謂東南満州一帯は地下資源の宝庫といわれ、之に群がる日本企業が軍の力を背景に「人より石炭」「人はいくらでも居るが、石炭は限りがある」と、酷使した劳工たちに対する処遇は、日本人として内容は分からないながら、黙って見過ごすことは出来ません。

思えば、私たちは直接思想的な又はこの間の歴史について講義を受けた事はありませんでした。それは中国側の日本人に対する心情を思いやっただけの事だったと後で知りましたが、しかし、このような現実を生きた教材として仕事の余暇に訪ねる配慮があったことは本当に幸せでした。

皆さんにお渡しした地図（2ページ）は簡単にしか書いてありませんが、私たちの移動は殆どが徒歩ですから、線を構成する各点には、それぞれ日本侵略時代の涙と怒りがある事をご記憶いただければと思います。

北京解放まで；

林子頭—>通化—>四平—>通遼—>彰武—>北票—>義県—>錦州—山海関—秦皇島

1948.9月（吉林省）（内蒙古）（阜新）（列車で）

私たちは次の戦闘に備えて、南下しました。

これが日本？

1953年、帰国した私は、勝者の米人にぶら下がるようにして大道を着飾った日本女性が歩いているのを見て、自分の目を疑いました。そこには戦時中の「鬼畜米英」の言葉が交錯しました。プール付きの大邸宅に住む米兵と、屋根と屋根が重なるような小さい家が並ぶ日本人住宅、戦争に負ける？とはこう

ゆうこと？では、侵略者が負けたあの中国戦場では？日中の区別は全くありませんでした。人々は嬉々として新しい国造りに励み、職場の保育所には時間が来れば授乳も可能でしたから「半边天」と提唱される社会は、女性は天の半分を支えるとの平等な社会でした。苦難の戦いの末路に私たちが望み、心から願って期待した社会は？どちらでしょう？？？

私はどうしても確認したいことがあったのです。今まで中国での生活が当たり前だと思って居たのです。でも、日本は違います。中国が随分遠くなりました。このまま日本の生活に慣れていけるでしょうか？確認しよう。

私は、中国行きを目指しました。これまで貴重な確認の機会があったのですが、私はいい加減に見過ぎしていました。これでいいのだろうか？ 行こう。出直しです。

名目、日本語教師

吉林省省都長春の、「白求恩（ベチューン）医科大学」は、最初から日本行きを目指す学生を養成していましたから、彼らの日本語はとても素晴らしいです。ただ、日々の生活で一般日本人と生活を共にしたら？戸惑う事があるでしょう。

自分自身が戸惑いの中から抜け出していないとき、私は大胆に日本語教師を目指しながら自分も悩みました。自然に生活が日本語と繋がるように？

でも、私を驚かせたのは学生たちの真面目さ熱心さでした。当時、電気は時間制でした。一般家庭では夕食が終わる頃には電気が止まります。学生たちはただ一箇所電気が着いている校内図書館で夜遅くまで自習しています。その後は暗い街路灯の下で何人もの学生が本を読んでいた。それは雪の降る冬でも変わりませんでした。

彼らとの付き合いで、私のいい加減さは吹き飛んでしまい、少しは真面目になったようでした。ただ、分からない事がありました。何故、侵略者の日本から、鬼から何を学ぶのでしょうか？私の目に映った日本は、米国の圧力に屈して諂（へつら）う、見たくも無い日本の現状でした。では、日本は戦前と何も変わって居ませんでした。夫は「あまり深刻に考えるな。その内わかるだろう」では夫はわかっていたのか？ 怪しいですが、相変わらず必死に現状と闘っていたのかもしれない。

それは、長春での事です。80年代中期だったでしょうか？近くの郵便局前に大きな展示板が立っていました。各戸に新聞の配達はありませんから、皆、この壁報（展示板）に目を通してから出勤しました。ですから壁報の前には、黒山の人ばかりでした。連続して掲載される『悪魔の飽食』[森村誠一が関東軍731部隊の人体実験を明らかにしたノンフィクション1983年初版]は、結構注目を浴びていたようです。

私の中国語では詳細部の理解は難しい。いえ分かったとしても納得出来る水準ではありませんでした。それは戦争期のドラマだろう？と、冷たく振り切った私ですが、人々は寒さにもめげず、真剣に記事を辿っていました。誰言うと無く吐き出すように、『「……鬼子」ならやりかねない……』との感想がきかれました。周囲に立つ人々は、皆大きく背いているではないですか。どうも反対は私一人のようです。

あの『日本鬼子！』[リーベン クィズ: 日本人の鬼]と、吐き捨てるように言った戦友の一言は、或いは？これかも知れない。思い立って私は日本に帰り、ベストセラーと聞いた本を貪り読みました。見慣れない単語の多さに苦しみながら、戦友の言う「変な部隊？」の輪郭を求めたのです。

更に内容を知るためには、私の中国語では自分自身を納得させる事すら足りません。はじめから学ぼう。何とこの想いは立派ですが、行き当たりばったり、行って初めて驚いたのです。黒龍江省唯一つのロシア語の外国語専門校に入学しました。一番素晴らしかったのは、この学校は731部隊遺跡に一番近い所にありました。結局学校は私の宿舎に成りました。話は脱線しますが、この学校のもう一つ素晴らしい所は、学生が日本人だけではなくた事です。南北朝鮮から、ソ連からの、様々な歴史を持った国の人が集まりました。はじめは食事時から始まって、暇が出来ると誰言うとも無く集まりました。話合いは勿論今習った中国語が共通会話ときめられていました。日本人以外はとても積極的です。習ったばかりの言葉を全て使って、話が弾みました。故郷の習慣や政治・歴史など彼らの熱意、想いが時を忘れさせました。特に朝鮮の学生は、何時もこの集まりの中心的存在でした。私はここで初めて日本の朝鮮侵略を知りました。互いの中国語は時に頓挫してしましますが、次の授業がこれを補ってくれました。

学校の門前から平房行きのバスが出ていました。値段は5分銭くらいだったでしょうか、授業もそこに私は三日にあげず平房731部隊跡に行きました。初めてお会いしたのが元侵華日軍第731部隊本部跡で唯一人遺跡を守る陳列館館長の韓暁先生でした。

はじめの挨拶はとにかく、先生は指先が黄色になるほどの愛煙家です。安い煙草の煙と先生はいつも一緒でした。私たちは近くのペスト被害区域をはじめとしてだんだん調査範囲を広げました。

「活動費の一切は、私韓暁のレベルが標準。」（活動経費一切は韓暁の支払える程度とする）当然、貧しさから言えば私も対して違いがありませんから、この提案に異義はありません。

第一番に訪れたのが「背蔭河」でした。この小さい村には、当時の歴史がありました。

1933年最初に石井四郎が細菌戦の実験地として犯罪の根を下ろした所です。ハルビンから、背蔭河まで車で一時間ほどでしょうか？走るより止まっている方が多いようなゆっくりの自動車ですが、これが却って乗客の楽しみにも成りました。それぞれが得た情報の交流、街で買った食べ物の味比べ、女性の服装などと話は尽きません。

「皆さん！！」「耳の空いている方は聞いてくれ！」。「皆さんはハルビン平房に731部隊跡があるけどご存知ですか？」話は終点まで……続いて、「興味のある人は、参観に来てくれ！今話を聞いた人は門票は無料にする！」貴重な往復の約2時間は宣伝の時間となりました。宣伝をしたのは私の韓暁先生です。皆会話を辞めて耳を澄まし、時に質問が行き交います。

背蔭河；有る焼酎造りでここ一番の本店です。ここの住人を追い出して（3日以内に立ち退きを命じ、応じなければ焼き払うと命令しました）命令者は日本軍人中馬大尉でしたから、人呼んでここを中馬城と言いました。つまりここそ人体実験のいわば初期の731部隊でした。日本軍は各地で起きる抗日組織の活動を逮捕するために、内部を監獄に修復し、大勢の抗日戦士を逮捕してここに監禁しました。逮捕した人々は監獄にしては彼らに給される食事に驚いたと言います。当時は貧しい農村では唐モロコシのパンが一個くらいが一食の時代でしたが、なんとここでは逮捕した人に肉料理などが出ました。でも被逮捕者がやや太ってくると獄舎から出されて別室に連れて行かれますが、もとの獄舎に帰ってくる人もありますがそれっきり帰らない人が多かったのです。内部の人は何故だろうといろいろな意見を出しましたが高い煙突から臭い煙が出る事から、人を焼いているのでは？と疑問を持ちました。早く逃げなければ？と相談しました。

日本の看守が酒を飲んで騒いでいる日に、脱獄し、30人ほどが、高い塀を越えて、脱走しました。皆重い足枷をしているので、二重の塀を越えるのは大変でした。12人が脱走に成功し、近くの農家の戸を叩いて足枷の取り外しを頼み、又は憲兵の追跡に追われて重い鎖を引きずりながら逃げたと言います。

幸い12人が農民の助けで足枷をたたき壊して逃げ、抗日連軍の夜回りに出合っ抗連本部に送られ

日本は中国で何をしたのか—山邊悠喜子さんの見続けた中国民衆の姿（報告）

ました。その中の一人が抗連で内部事情を報告しましたから、内部の状況は明らかに成りました。

足枷をたたき壊した農民が後日残された足枷の発覚を恐れてこれを近くの井戸に投げ捨て翌日修理と言ってこの井戸を埋めてしまいました。農民はもしあの足枷が取り出せたら、我々が脱走の手助けをした事が事実となると今も証言して居ます。

発覚を恐れた日本軍は直ちにここを閉鎖して移動しました。12人はその後の戦闘に参加して戦死したと伝えられています。

歩平先生と東北四省現地調査

「歴史家は、古い文書の中から貴重な資料を見つけ、後世に残す事も仕事だが。満州国時代の体験を記録し、後世に残す事も又大事な歴史家の努めです。体験者が少なくなり事実を語る人は居なくなります。私たちはこれを書き残し次代に事実を伝えることも歴史家の任務だと思います。力を合わせてこれをやりましょう」感動的な出発式でした。

総勢東北四省の研究者 50 人が一台の大型バスでハルビンから一路北へ行動開始でした。東北民主連軍の活動は抗日戦を戦った老区が主でした。今回は取材の範囲をも含めて、都市から農村、訪れる地域も各種多彩、体験者も様々でしたから、私は一挙に加害事実を知る範囲を広げることにもなりました。戦争とは？日本の侵略とは？私は知らないままに調査隊に加わり、つぶさに日本の犯罪を知る事になりました。

確かに私は戦争に参加はしていません。現地住民を殺した事ありません。では、私は侵略に反対して、何かしたでしょうか？ 天皇の命令に何の疑いもなく侵略者に従ったのです。私が追求して止まない東北民主連軍の戦友たちは、自らの命を懸けて侵略者と闘いました。それ故に日本軍に「特移扱」として 731 部隊で殺害されたのです。彼らは如何なる迫害にも頭を下げることはしませんでした。只ひたすら「寧死不屈」[ニンス プーチュ]です。

これまでの私は、訊いただけで何もしませんでした。可愛そう、気の毒だ、と思うだけなら、矢張り犯罪者と同じでは？ 侵略者が敗退した今、私は農民たちが、民主連軍の戦友たちが、汗を流して造った作物をお腹いっぱい食べています。中国語で『背叛』(bei pan) (背く、謀反の意味だそうです)。

……と、私は何日も眠れぬ夜を過ごしました。

各位へのお願い（反鬼子宣言）；

1972 年 9 月、日・中両国首脳が共同声明に調印しました。

「日本側は過去に於いて日本国が戦争を通じて中国国民に重大な損害を与えた事について責任を痛感し深く反省する。」と前項にあります。しかもその第五条に「中華人民共和国政府は、中日両国国民の友好のために、日本国に対する戦争賠償の請求を放棄する事を宣言する」とあります。ここで求められているのは、戦争を通じて重大な損害を与えたことに責任と反省です。しかも「両国国民の友好の為に…日本国に対する国家賠償を求めない」と有ります。日本と中国のこの条約は日本に大きな責任と侵略戦争への反省を促しています。その重みを日本が自ら友好の基礎に於いて実施すべきです。

日本の戦争遍歴；

72 年前の日本敗戦は、二度とあの戦争による惨禍を残してはならないとの決意の表れと受け止めました。それは中国側の根底にある、深い思いが読み取れます。

私たちは歴史を想い致せば、日清戦争により日本は嚇嚇たる勝利を得ました。清国からむしり取った

戦後賠償（3億4500万円）は、その75%が軍費の後始末、次なる軍備の拡張に準備され、2000万円は天皇に収められました。死をもって闘った国民は苦しみ以外何を得たでしょうか。日本の勝利は、国民に敗戦国の朝鮮人、清国人への蔑視を養成し、支配民族の傲慢を造って、国民を墮落させました。日本は国民の犠牲の上に再度次の戦争へと駆り出されたのです。（;『日本の歴史』井上清 岩波新書）概略ここ100年来の日本です。

是非各位におねがいしたい事があります；

関東憲兵隊の「特移扱」記録は、3000人とも言われる抗日英雄戦士を殺害した『鉄証』であり、人類に対する最大の犯罪であることをも証明しました。

2001年、2003年、黒龍江、吉林両省档案馆から日本関東憲兵隊による「特移扱」文書が発見公開されました。発見者は、現ハルビン市平房区にある731部隊遺跡の現館長金成民氏で、文書は関東憲兵隊が「特移扱」を以て、氏名が明らかになった277名の逮捕記録と訊問文書でした。

既にこの犯罪事実は、関東憲兵隊員の供述により、明らかでしたが、その証拠となるものが明らかにされていませんでした。敗戦前後の処理不徹底（隠蔽工作を含め）で、私たちは、確たる証拠『鉄証』がありませんでした。今回中国側から発見された文書を元に、我々は怒りの炎を上げる必要があったのです。夢にも描いた事実を証明する『鉄証』の発見に私たちは歓喜しました。

文書は、長期間土中に埋められていましたから、部分的には判別困難なものもありました。発見者金成民氏、文書提供者档案馆、社会科学院、省外事弁公室の協力を得て、出版され、公表されました。事実はもはや隠し通せるものではありません。発見文書には；

「当人は意志強固にして逆利用の価値なし、特移扱いが適当」「司令官は現地の判断に同意」明らかに731部隊送付許可の書類でした。「抗聯」で苦難の抗日運動を続け「寧死不屈」と侵略者に立ち向かった英雄たちの訊問記録は、(鬼より)人間としてこの『鉄証』を以て私たちABC企画委員会は、侵略犯罪を国に問う貴重な文書として、現地档案馆、省外事弁公室、社会科学院と共同で出版し、公開となりました。しかし、実行者日本はこの事実の前に、現政権はもとより、戦争首謀者天皇も、黙して語らず。国会も又、この事実を問うことはありませんでした。

関東憲兵隊の訊問記録、関東憲兵隊司令官の同意書、731部隊送付の報告書まで（「特移扱」規定、関憲警第58号）、綿密な記録からもはや事実を隠蔽して、犯罪に口を閉ざす事は日本の伝統「潔し」からしても許される事ではありません。文書の存在が中国各報道機関から公表されると、上述の現館長金成民氏・前館長韓暁先生をはじめ、陳列館、档案馆には連日のように電話がかかってきました、名前及び住所の確認問い合わせが殺到したのです。敗戦から70年余、毎日帰りを待ち望んだ父母兄弟が、この報道に或いは？と期待したのは当然でしょう。あの厳しい抗日戦争の中で、死を賭して戦った英雄は当然所在を明らかにして葬られるべきです。少なくとも英雄として祖国の大地に葬られるべきです。勿論、実行者日本は、この犯罪事実を自ら認めて、世界に謝罪すべきです。何故なら、この人類に対する犯罪を世界に向けて公表し、自己の犯罪を告白し謝罪すべきです。

ましてや、肉親を失ってその行方も知れず、毎日その帰りを待ちわびた被害者遺族の思いは如何ばかりでしょう。ある遺族は言います。「日本の鬼子さえ来なければ！」では何故日本国民は天皇の命で、国の命で「鬼になって」罪亡き人を殺害したのでしょうか？後年ハバロフスク裁判で関係者12人が裁かれました。推測3000名とも5000名とも言われる英雄たちが細菌実験の為に殺害されました。

この章の巻頭に述べました。「日本国が戦争を通じて中国国民に重大な損害を与えた事に責任を痛感して深く反省する」。貴重な文書の発見があっても、深い反省は今でも成されていません。中国を仮想敵国といい、人類に対する最大の犯罪に謝罪の一言もない日本を、世界の人々は信じる事が出来るでしょ

うか？安倍の言う「戦争の出来る普通の国」が、戦争で人々を幸せに出来るでしょうか？戦争でアジアが幸せになったでしょうか？中国を訪問された方々はあの国境の山にいくつかの空墓を見たでしょう。辛うじて生き残った英雄たちを敗戦直前に殺害し、骨灰まで松花江に流し、故郷に一粒の灰まで帰ることが出来なかった英雄たちを遺族が何時か（例え骨になっても）英雄として我が家に帰ってくるようにと空墓を建てて帰りを待っています。戦争終結から 72 年余が過ぎました。やっと犯罪者日本の関東憲兵隊により殺害された事実も明らかになりました。空の墓を英雄の墓として保存したい。涙と共に語る肉親の言葉です。

細菌戦の犯罪はアジア一国のものではありません。それは全世界人類に対する犯罪です。ただ兵器産業で巨万の富を築いた者だけが「鬼子」となって歴史を繰り返すのです。兄を 731 部隊に送られて殺害された事実を初めて知った高名な医師であり、遺族のお一人の、李厚文先生は「家史」を語られた後、苦痛の中から、一言を述べられています。被害者のお一人としてその想いを概略引用させていただきます。

李厚文先生の訴え

私は、医師として生涯を医学に生きてきた。対日交流も既に 20 数年になる。しかし、私は日本人が犯した罪悪を決して忘れる事は出来ない。「国仇家恨」、どうして忘れられようか？日本軍が細菌兵器を研究し、生きた人間に細菌実験を実施した、これは人道に反し、国際法にも違反している。それは畜生にも劣る行為と言わねばならない。我々学問として医学を研究している者は、例え実験材料が動物であっても命を奪う事には躊躇（ためら）いがある。ましてや人間の命を奪うとは。しかも 731 部隊が使ったのは烈性菌のペスト、腸チブス、コレラ、みな甲種伝染病だ。彼らは種族の絶滅を目指しており、我々中国人の絶滅が目的なのだ。これらの恨みが、どうして忘れられるだろうか？このような、軍国主義の復活を許していいのか？日本が降伏してからも、東北各地に疫源を残して逃亡したので、扶余や各地で、流行病が発生した。その為に多くの人が亡くなった。私は部隊で現地を体験した。日本の関東軍は全く人間性を失ったものだ。私は毎回故郷に帰ると、兄が逮捕された当時を想像して心の中から怒りがわき上がって来る。この犯罪を許さない。（四兄は憲兵隊に逮捕され、731 部隊へ送られた。李厚賓（彬）氏は李厚文氏の 4 番目の兄に当たる。李厚文氏は中国医科大学著名な胸部外科の専門医、胸部外科主任、副学長、校長）

赤い夕日が東北の空を染め、労働の一日を終えて人々は帰路に就く。老母が今日も夕日に手を合わせている。戦争は終わった。私たちの国が出来た。何時かきつと帰ってくる。

『反鬼子宣言』；

日本人は、兵士として命じられるままに、殺人の鬼と化した。実行推進者日本国は、これら実行行為に心からの謝罪と反省をしたでしょうか？おおよそ医学とは、民族・人類の健康な生存を助けるものであって、他の理由は存在しません。ましてや兵器として細菌を逆利用することは、人類生存に最も恥ずべき行為です。731 部隊の行為を全民族の名において糾弾しなければなりません。

① 侵略による戦争で何が解決したでしょうか？私たちは、犯罪の実行責任者である天皇・及び軍部に上述の事実をもって心からの反省を求めます。

② 日本は貪欲に侵略を推し進めました。これによって被害国の罪なき人々を殺害しました。加害国の国民として自国の政府に心からの反省と謝罪を求めます。如何に言い繕ってもこの犯罪は歴史の証明として消えることはありません。

③ 特に民族の撲滅を意図する細菌戦・毒ガス戦の実施は、世界人類の名において絶対に許されない行為です。

他国を侵略し、犯罪の実行を許した私たち国民は、日本政府が以後全世界に戦争による犯罪を決して

行わないと誓うべきです。

終章

49年2月、北京の無血解放から、53年帰国まで。

49年4月—>天津北倉—河北—山東—河南—湖北—湖南—広西—貴州—柳州—賓陽—南寧—広西——>上海（帰国）

私たちは、透明な珠江の流れで水浴びをしながら包帯の洗濯など久しぶりに平和を愉しみました。

日本から、「赤旗」系統の出版物が出回り、日本の状況も少しずつ伝わって来ました。

この頃になると、中国独自で養成された医務人員が大量に配属されて来ました。基礎から本格的に学んだ彼らの知識には圧倒されました。私たちはどちらかと言えばソ連から学び、多くは実践の中から得た体験による対応でしたから。

この困難な時期に、いつの間にか次代を担当する若い専門家が養成されていた事に驚きました。特に看護婦の職業は、言葉通り、日本では殆ど女性の仕事と思われていましたが、若い男性が看護員として参加し、新しい雰囲気が生まれました。更に、戦場で負傷する主体は男性が多いのですから、男性の看護員も適応すると考えるのは当然でしょう。目の前に新しい展開が見えて、この国の未来を嬉しく思ったものでした。

傷員も戦線の展開から、私たちは常に民衆と共に戦う事が中心でしたから、少し戦線が落ち着くと、一般住民の患者も受け入れるようになり、高度な外科治療も可能となりました。私は「組織療法」に医師の指導で担当しました。

49年10月1日、新中国の成立を世界に発表して、人民こそが国の主人公との意識が高まって、国民にとって高揚した時代を迎えました。もう絶対に愚かな戦争はないと心から喜び合いました。文盲一掃運動で、書店に行けば何時でも暖かいお湯を飲みながら時間の制限がなく本が読めました。何時でも人民の為、希望に満ちて帰国を忘れませんでした。

私は今まで給料をもらっても使い道がなかったのですが、街で明るい花柄の布を見て、急に何か買って見たくなり、1疋を求めて背心（袖無しジャック）を作りました。一針、一針、日本の侵略から歩いた道のり、戦争のない平和を花柄に込めました。地味な軍服の襟元を少し開けて花柄が見えると急に忘れていた青春が帰ってきました。

軍の指導層は、日本人の帰国も近いと見て、日籍人員が抜けた後が考えられていたと思います。

私は、新たな社会主義の国造りに向けて逞しく胎動する国を想像しました。戦友たちのお陰で私も少し協力することが出来たと、自負心が顔を出していました。

日本人の帰国が近くなると、不安と同時に父母の事が思い出されました。

最後に私の総括；何故、「小鬼子」とも言われた私が考えを変えることになったのか？

一言、それは人民と軍は魚と水の関係と言われます。兵士は人民の為に、部隊は『為人民服務』、何と高尚な言葉でしょう。それは私が共に過ごした8年が教えてくれた貴重な教訓です。

総括とも言える言葉、それは苦楽を共に生きた「中国人民解放軍」その名前がその後の私を支えたと言えます。これこそが平和を築く世界一の軍隊だと賛辞を送り、心から尊敬を惜しみません。

註 1：遺棄弾処理

45年8月15日、確かに戦争は終わりました。でも、100万と言われた関東軍は一体何処に消えたのでしょうか。しかも戦争は多くの恐ろしい「ゴミ」を残しました。「飛ぶ鳥跡を残さず」敗戦と同時に、残されたのは、危険この上ない人類の生存をも危うくするゴミでした。今、日本にある米軍基地を見れば、容易に想像できます。残された遺棄毒ガス弾が更に多くの被害者を生みました。侵略者が逃走しても残されたゴミは、確実に現地の住民を脅かして居ます。何も知らされていない、住民たちは、河に遺棄された、山に捨てられた遺棄化学兵器が、無防備な人々を容赦なく襲いました。負けたとは言え、日本軍隊に一片の良心があったなら、先ず住民の安全を考慮して、少なくとも遺棄した場所を事前に通告すべきだと思います。でも、未だにその配慮はありません。紀律正しいと誇る日本軍隊が、日本占領14年苦難の戦いに耐えた人々に、中国の抵抗力に負けた敗戦に、気の小さい「腹いせ」でしょうか、それこそが恥を知れ！住民の被害は、計りしれません。

私たちABC企画委員会の活動で、遺棄毒ガス問題との関わりは歩平先生のご協力と無縁ではありません。否、むしろ先生の研究と発言があつてこそと思います。

確かに私は解放軍時代に日本軍は戦争時に毒ガスを使用したとの事は何度か耳にしましたが、敗戦後も各所に放置された化学兵器がその侵略性をむき出しにして、住民に襲い掛かったとは？思いたく有りませんでした。歩平先生とハルバ嶺を訪れ、現実が眼前にあり被害者や処理に参加した現地住民の苦痛を知ったとき、私の不満足な歴史認識が音を立てて崩れました。

2006年11月週刊金曜日に掲載された「中国『遺棄化学兵器』を巡る『正論』のデマ」に日頃温厚な歩平先生の、心の中からの吹き出すような怒りを知りました。侵略です。

『正論』曰く、「遺棄化学兵器は既に、中国に引き渡されていた。更に「既にODAが終了したにも拘わらず、中国が正当性を装って『金を引き出す』『政治カード』とした」と言ったのです。さらに、「敗戦時日本軍は中国全土で整然と兵器の引き渡しを行いましたから、『化学兵器も例外ではない』」と述べています。これらが偽りである事は、72年が経過した今でも、各地から危険な遺棄化学兵器が発見されている現状を見れば、明らかです。一生不治の病を背負って生きなければならない被害者が今も発生している事実に、「整然と引き渡した結果」だと言うなら、それは整然と受け取った中国側が悪いとでもいえるのでしょうか？それは何と盗人猛々しい。世界に、日本の恥をさらけ出したことになったと思います。中国各地で改めて侵略者への怒りが吹き上がったことは当然でしょう。

2010年9月1日、中国南京市でOPCW(化学兵器禁止機関)が、国際社会に向かって「日中両国の長年の努力を経て遺棄化学兵器廃棄処理事業が開始される」とのメッセージを發しました。この後廃棄処理設備の試運転が行われて、事業が開始されたと報道されています。ではこれで全てが処理され問題が無いといえるのでしょうか？豊かな山野に戦後、開発が開始された時、黒土の下から悪魔が人々を襲ったのです。OPCW規定の遺棄弾処理終了の日程が何回も修正されています。

今年2月の状態では武漢で実施された処理設備を改造の為一度日本に返送すると言われていています。報告では以後は東北での作業のため寒冷地でも対応出来るように改良するといわれています。2019年には新しい設備の試験運転が予定され、実際には2020年から作業が始まるとされています。しかし最終処理は2022年と指定されていますから、33万発と言われる現有遺棄弾が予定通り処理完了となるのでしょうか？年間約9万発処理と仮定されていますから、2022年に処理可能との予定が成されています。

日本国内でも茨城県神栖（井戸水汚染）で、3歳の長男に深刻な後遺症が発見されました（東京新聞2005/01/19）。2003年8月には、黒龍江省チチハル市の工事現場で5個のドラム缶が掘り出され、マス

日本は中国で何をしたのか—山邊悠喜子さんの見続けた中国民衆の姿（報告）

タード（イペリット）剤が確認されました。（直径 45cm、高さ 75cm）ガス入りのドラム缶で事故が発生、1人死亡、被害者怪我人 43人と報道されています。

これまでも日本で裁判が行われています。派遣された日軍元兵士がハルビン北方の関東軍弾薬庫を警備していた 8月上旬、上級が砲弾を深く穴を掘って埋めるようにと指示したと証言しましたが、岩盤が固くて掘れないので「古井戸に次々と投下した。」との証言を聞きました。

続いて発生した被害者を前にして、私たちは、「これは昔の事だ、戦争は終わった」と笑っていられるのでしょうか？ 欲張りの戦争屋が太るために、人殺し兵器を造って、罪なき人々が何故戦争で苦しまなければならないのでしょうか？

2004年の新聞記事に、日本軍の毒ガス戦が「訴追中止」となったことについて将来の作戦行動が制約されると訴えたことが通って、米軍上層部がGHQに訴追中止を働きかけ、その主張が通ったと記録にあります。（侵略は、細菌・毒ガスに限らず犯罪事実が隠蔽された。…『毒ガス戦と日本軍』岩波書店 吉見義明著）もし、この時、世界に、私たちに、歴史に対する勇気と判断力があつたなら……。

多くの被害者も死を免れ、又は一生苦しむ事は無かつたでしょう。其の時撤退する日本軍兵士に、僅かな人間としての良心があつたなら……。

今でも各地で上述のように遺棄弾の処理が行われています。戦争が 45年 8月 15日 で全て終わったと考えるのは早計です。今、安倍政権は米軍と共に新しい戦争に向けて、軍備を計画しています。

1999年 7月に日本と中国の間で「遺棄化学兵器の廃棄に関する覚え書き」が交わされ 化学兵器の処理が始まりました。

中国の若者が、「持ってきたのだから」日本に「持って帰れ」、当然でしょう。輸送の時砲弾から毒液が漏れたら、と災害発生を考慮して、中国側が譲歩し現在地で処理する事に決められました。

では？毎年のように発生する被害者を目の前にして、反省もない日本は、住民の当然の要求をなんと答えるのでしょうか？

歩平先生と『健康報』の記事を見た私は、記者金雷氏を訪ね、同行して頂きハルバ嶺を訪れたのは 1994年の事でしたが、以来懇切丁寧な歩平先生の著述に励まされて、被害者を訪問し、日本で共感する仲間と毒ガス展の全国展示を实行しました。多くの元兵士が「あれは無害だ」と隊長に説明されたと会場で紹介がありました。では発生した被害者は？無害の証明は？私たちはやっと訪れた平和に、喜ぶ暇もなく、苦痛に耐えて生きる人々を訪問しました。これほどの犯罪があるのでしょうか？それでも「私たちは生きなければならない」再び「後世にこの悲しみを残さないために」。

と、毒ガスの展示は、中国での強い発言から始まりました。はじめの展示は華麗なあの皇宮博物館（偽満州国皇宮博物館・長春市）の前門で始まりました。

毒ガス弾の製造・使用は、人類に対する犯罪行為です。各位は、ご記憶にあるでしょう。チチハルで、又は敦化（高裁敗訴、9月9日最高裁）で、将来のある若者が被害で苦しんでいます。化学の進歩で兵器の破壊能力は格段に進みました。兵器は確実に人間を殺すものです。平和とは全く無縁、且つ逆方向の相容れないものです。

安倍首相は戦争の出来る国を言い、積極的平和外交を歌い、米軍に協力して沖縄を、日本各地に軍事基地化を構築しています。高額な軍事産業で利益獲得を目指す企業、再び国民を戦争へと駆り出す者たちに平和を論じる資格はありません。あの戦争末期、沖縄の住民を死の淵に送り、今又、米軍の意のままに、国民を犠牲にする行為を私たちは絶対に許す事は出来ません。

註2：戦陣訓（1941年1月8日）のたれ死の教え

東条英機の名で全陸軍に。

恥を知る者は強し、常に郷党家紋の面目を想い益々奮励してその期待に答えるべし、生きて虜囚の辱めを受けず、死して罪過の汚名を遺すこと勿れ！「屍を戦野に曝すはもとより、軍人の覚悟なり、例え遺骨の帰らざる事あるも、敢えて意とせざる様、予て家人に含め置くべし。」

河北の戦場から、日本に劳工として送られる寸前に、一死を免れた陳平氏は、傷付いた戦友を膝に抱きながら雪の監禁小屋で過ごした悲惨な状況を語りました。

「貴様ら何時まで生き恥曝す？……何故死なないのだ」と監視の日本軍兵士の言葉を聞きました。私たちは「命有る限り生きて敵を知る」。これでは、最早勝敗は決まっています。

（「軍人勅諭」、「戦陣訓」にみる、「大権は朕に有り、汝らは股肱として朕に仕えよ。義は山嶽より重く、死は鴻毛より軽し」、「生きて虜囚の辱めを受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ」兵士に命の軽視こそが美德と説き、侵略に抗した英雄たちを殺害させた。どれだけ帰りを待つ遺族の涙を誘った事でしょう。侵略という、犯罪の事実を知った私たちは何をしなければならないのでしょうか？）

付記 ；

私たちは四平～北票へ、そして義県から汽車で山海関へ、天津近郊の北倉で、北京での大規模な戦闘に備えて準備を整えましたが、北京が無血解放されて、再び南下しました。

関里に入ると、その印象は全く変わりました。白山黒水資源に抱かれた東北は、ある意味で豊でした。でも三光政策が実施された華北の大地は、東北と同じではありませんでした。蹂躪された農地は乾いて農民の耕作を待って居ます。彼らの懸命に作業する姿が見られました。私たちの部隊は、相変わらず農家の作業を手伝いながら、農民から訴苦を聞く毎日でしたが、部隊の殆どが医師、看護婦の日本人主体の医療隊です。途中で病人が居れば簡単な治療方法を教えたりしましたが。住民も同僚の中国人医師も、私たちに対して決して非難がましい事は言いませんでした。寧ろ慣れない労働を労ってくれましたから、私たちはこの待遇を自然に享受しました。でも関里はそうはいきません。

1949年3月下旬でしょうか、農家はそろそろ始まる春耕に備えて忙しい時期です。

毎回休息の時、炊事場を借りて部隊全員の食事が作られます。「食事ですよ！」知らせで私たちは各班ごとに食事を受け取りに行きます。農家の叔母さんが、綺麗な花模様の食器を貸してくれました。私たちは楽しく食事を済ませると出発の知らせを待っていました。

何時もなら直ぐ出発なのに、時間が過ぎてから出発です。後の話でしたが、あの綺麗な食器は食器ではなかったと知りました。農家は私たちの会話から、かつての侵略者日本人である事を知ったのです。それは農家の女性のささやかな報復でしょう。あの三光政策を思えば、何不自由なく人民の部隊の中で、部隊への信頼故に私たちも当然のように彼らの好意を受け入れてきましたが、それはあまりにも勝手でしょう。私たちは悶々と次の行程を進みました。許されるなら、かつての日本軍が農民に何をしたのか、私たちへのささやかな報復をわびて少し話を聞きたかったのです。勿論反省を込めたこのような思いは、直ぐには生まれませんでした。時間の遅れは中国側が農民との対話であったと後で知りました。

このことが私たち日本人にもう一度あの戦争を思い出させました。小休止のとき、かつてなかった事です。侵略についての質問が出ましたが、当時の私たちは未だ誰もはっきりした説明は出来ませんでした。貧しい村を通過しました。農家の入り口に備わっている大釜を借りて食事を作りました。各位が座ったテーブルには小さい塩壺があって、それはただ一つの副食品でした。大釜から良い臭いがして雑穀のお粥が出来ました。近所の子供たちが入り口で私たちの様子を黙って見ていました。私たちの部隊

には、12、3歳の通信員が連絡などの任務を持って同行していました。自分の椀に入れられた雑穀粥を黙って、見ている子供たちに差し出しました。

見ていた農民が、あんたたちはこれから未だ何里も歩かねばならない。子供は欲しがりますが、心配無用と言いました。でも、小通信員は黙って子供の食べるのを見ていました。「私のも……」と私が椀を差し出すと、押し戻した小兵士は、「我家にも小さい弟がいます。今日は食べたかな？」と、席を立ちました。表で見ていた子供たちは、一椀の粥をみんなで分け合って食べていました。何度か聞いた「日本鬼子！」を思い出しました。誰に質問してもその返答はありませんが、東北からここまで、私たちはかつての侵略の道を辿って来たのです。鬼の正体が理解出来ないとしたら「お前は何を見てきた？寝てたのか？！」と自問自答でした。

後に《人民解放軍衛生工作史》に、戦争捕虜と協力者の区別について説明がなされていました。中国人の戦友たちは、どんなにか苛立ち、きっと怒りをぶつけたかったでしょう。規則や命令で押さえられる問題ではないはずです。事実の前に黙って私たちの理解と進歩・成長を見ていてくれた先輩戦友たちの気持ちが今ならこの上なくありがたく理解できるのです。

1949年4月下旬、私たちは楊柳清から運河で南下しました。大運河は水が少なく私たちは交代で堤から船を引き（拉船）ました。河北に入り、滄洲>徳洲>臨清で下船、黄河を越えて河南へ、49年5月には鄭州の西、荦（xing）陽・49年6月下旬には徒歩で漢口に到着しました。慣れない南方の生活で、マラリアなどが多発しましたが、キニーネなどが少なく、薬品の補給に苦労があったと聞いています。徒步行軍ですから足に血豆が出来ました。自分の頭髪を消毒して通すと、大体一夜で腫れが引きました。恐らくこれらは苦難の中から生み出された治療法でしょうが、勿論近代的に造られた靴を履いたら不要の発見かも知れませんね。

（93年～私たちは731部隊展を実施して全国を回りました。その時「中帰連」（中国帰還者連絡会）の元将校、兵士が撫順では、毎日日本語の本を見て勉強したと言いました。何と羨ましい、と密かに妬ましく思ったのです。でも、それより私たちを信頼し、傷兵の治療を任せてくれた中国側の暖かさが、そして、侵略の爪痕をつぶさに見せて教育した人々の大きさを今は嬉しく思っています。もしあのときもう少し学ぶ機会があったら、あの涙ながらに訴えた住民の声を記録できたらと残念にも思います。只、日々の行動を追いかけるだけで記録もとれなかった自らを只残念に思いながら今も昔の道を歩いています。）

バスで対話

私はこのバスがとても好きです。バスの内部はぼろぼろでしたが、何時も満席でした。多分平房まで5分くらいだったと思います。可愛い女性の服務員（車掌）がいて、次の停車点を知らせます。皆お金を払って降りますが、お爺さんが払わずに降りました。「お爺ちゃんお金は？」「ない！」「今度来る時息子さんからもらってきてね」、「うん」。これだけの事ですが、これが東京ならどういう会話になるでしょう？

80年代には馬車がありました。山のように荷物を積んで、御者は荷物の上で寝ています。道をよく知っている馬が黙っていても何時もの道を行きます。私も乗せてもらいましたが、「近頃は車の方が便利で早いのでは？」と質問すると、「車は高額だし、石油入れて、物言っても返事がない。馬は良いよ、寒ければ俺は馬と一緒に寝れば暖かい。何しろ馬は感情がある」。それは「80年代昔のことさ」と言われるかも知れませんが、私が頻繁に中国へ行く理由は、こんな所にあるかも知れません。中国も段々変わります。当然ですが、いくら外見が変わっても、人間の言いしれぬ暖かさが私を呼ぶのです。

■山邊悠喜子さんの歩み（概略）

- 1929年 第二子として渋谷区幡ヶ谷に生まれる。両親、姉、妹、弟の6人家族
- 1941年 中国東北満州製鉄（遼寧省本溪市）に赴任していた父親の元に一家は移住。未完成の女学校に入学。
- 1945年 12月、求めに応じて、東北（抗日）民主聯（連）軍（*）に参加。
（*）1948年1月、東北人民解放軍と改称。
- 1948年 家族は帰国。
- 1951年 同じ部隊で働く山邊賢蔵氏（元日本関東軍航空隊員）と結婚。
- 1953年 長女を伴って帰国。賢蔵氏への尾行は1972年の日中国交回復まで続いたと言う。
- 1976年 退職して、再び頻りに中国へ。元戦友を訪ねる。
- 1988年 長春（白求恩医科大学）滞在中、関東軍防疫給水部（731部隊）人体実験のニュースを壁新聞で知る。
- 1989年 帰国。上記作者森村誠一氏の著述を読む。
- 1991年 中国語の学習に黒竜江大学に在学。元731部隊本部跡の陳列館に通い、韓曉館長に師事。
同時期東北三省社会科学院の現地調査に同行。歩平氏（黒龍江省社会科学院歴史所処長）の提唱「残された侵略の跡をたどる。体験者は年々少なくなる事実を保存することも歴史家の使命！」感動して同行。以後緊密に教えを頂く。
「731部隊展」全国展開の企画開始。
ハルバ嶺に、遺棄毒ガス弾の現地調査。
黒龍江省ハルビン市で、8月「国際シンポジウム」開催。関係者被害者一同に会す。
- 1996年 731部隊・南京大虐殺・無差別爆撃事件訴訟提訴を支援。山邊さんが「お姉さん」と呼ぶ、敬蘭芝さんも原告として来日。1999年一審敗訴、2005年高裁敗訴（「個人が受けた被害を、加害の相手国に損害賠償を求める権利はない。更に、時効だ。」）日本全国で毒ガス展を開催。
- 1999年 ABC企画委員会として再設立。（A；核兵器、B；生物兵器、C；化学兵器）
- 2001年 1月、「731部隊遺跡の世界遺産登録を目指す会」立ち上げ、遺跡保存に募金運動開始、正式着手。
- 2002年 最愛の同志・賢蔵氏逝去。賢蔵氏は長年、日中平和友好会の活動に従事。
- 2014年 黒龍江省社会科学院から名誉研究員の称号が与えられた。

■山邊悠喜子さんを知る本

「私は中国人民解放軍の兵士だった 山邊悠喜子の終わりなき旅」小林節子著 明石書店

■山邊悠喜さんが関わった翻訳書

『731部隊の犯罪・中国人民は告発する』韓曉著、山邊悠喜子訳 三一書房 1993年

『日本の中国侵略と毒ガス兵器』歩平著、山邊悠喜子・宮崎教四郎監訳 明石書店 1995年

『日本軍の遺棄毒ガス兵器——中国人被害者は訴える』高曉燕著、山邊悠喜子・宮崎教四郎訳 明石書店 1996年

『尊嚴』「半世紀を歩いた『花岡事件』」旻子著、山邊悠喜子訳会員共著 日本僑報社 2005年

「731部隊」罪行『鉄証』 関東憲兵隊『特移扱』文書 ABC企画委員会、黒龍江省档案馆、省人民対外友好協会 共編 黒龍江省人民出版社 2001年出版

「731部隊」罪行『鉄証』「特移扱・防疫文書」文書 ABC企画委員会、吉林省档案馆 日本近現代史研究会 共編 中国・吉林人民出版社 2003年出版

紙芝居「静かなる悪魔 知られざる 731 部隊」について

根津公子

「これからお話しする事実は、戦争中に東大など最高の学問を身につけた医者たちが行った犯罪である事を、心にとめてください。」で始まる紙芝居。細菌実験、凍傷実験、ネズミの飼育、少年兵の教育、生体解剖・・・、13の場面を描き、ことばにする。1994年、八王子市立石川中の2年生12人が作成したもの。

1994年5月末、「陸軍中野学校と731部隊展」実行委員会から、「731部隊について中学生に何かのかたちで発表してもらえないか。部隊展は9月。」と私宛に話がありました。当時私は2年生の担当、石川中学校は平和学習に力を入れており、3年次のひろしま修学旅行に向け、修学旅行実行委員会が立ち上がったところでした。同実行委員会からの依頼に、「今は無理」と断ろうかとも思ったのですが、生徒たちへの依頼を私一人の判断で断るのもどうかと思い、修学旅行実行委員会で話をしました。すると、「先生が『日の丸』を下ろした（注）から声がかかったこと。勉強して紙芝居を作ろうよ」。一人が発言すると、皆それに賛成。不安は実行委員会担当の私だけでした。

期末テストが終了した7月初めから、日本の侵略及び731部隊についての学習を始めました。まずは、映画「侵略」と「黒い太陽731部隊」を学年全体に呼びかけて観ました。冷房設備がない、午後うだるような暑さの中、自由参加にもかかわらず、ほとんどの生徒が観たのを思い出します。

そして夏休み、修学旅行実行委員の生徒たちは部活動とうまく折り合いをつけながら連日、図書館にある本や私の持って行った本を読み、意見交換し、8月後半から紙芝居づくりに取りかかりました。8月末に完成。9月には「陸軍中野学校と731部隊展」で上演しました。上演に先立ち、朝日、毎日新聞が写真入りで、大きく報道してくれました。日本会議が政治を支配する今だったら、「偏向教育」呼ばわりされ実現しなかったと思います。

新聞報道の反響は高く、町田の実行委員会からも声がかかり上演。石川中でも保護者からも評価され、以降、紙芝居は文化祭や後輩たちの平和学習で活用され続けました。

2000年3月末、「同一校10年で異動」に該当した私は、荷物を運び出す作業をしていて、紙芝居がなくなっていることに気づきました。施錠した被服準備室に保管していたので、紛失するはずがないのに、です。

この直前に父が亡くなり、私が休暇を取っていた間に盗まれたことに間違いはなく、校長を問い質したのですが、返事をしてもらえませんでした。八王子市教委が撤去した、と私は思っています。もっと追及すべきでした。今さらながら悔しいです。

いま私の手元にある紙芝居は私用にコピーしておいたもので、実物は4つ切り画用紙でした。

（注）1994年3月の卒業式の朝、校長が職員会議の決定を反故にして校庭の掲揚塔に「日の丸」を揚げたことに対し、生徒たちからは抗議の声が沸き起こった。私は職員会議の一員として職員会議の決定に戻そう、石川中の民主主義を護ろうと、校長の揚げた「日の丸」を下ろして、減給1月処分を被った。

*講演当日の紙芝居上演はユーチューブ（<https://youtu.be/dckUxnb-vX8>）で公開されています。